

近世文化と罕人（下）

栗田元次

目 録

- 一、罕人の文化に貢献せる因由。
- 二、儒學と罕人。
- 三、史學と罕人（以上前號所載以下本號所載）
- 四、地理學と罕人。
- 五、醫學本草學と罕人。
- 六、文藝と罕人。
- 七、附言。

四、地理學と罕人

地理學は上代に朝廷で風土記や國郡圖を徵せられた後、中世末期に切支丹の弘通に伴つて世界地圖地球儀の傳來した外は、近世まで殆ど發達の見るべきものが無かつたが、近世に入るや地誌地圖の編輯・刊行相次ぎ、急に目覺しい發展を現じたのである。併し地圖は作者の不明のものが多く、その名を記して居ても多くはその事蹟が解らぬから地誌の作者についてのみ述べよう。

世界地誌の最初としては元祿八年及び寶永五年版の西川如見の華夷通商考にその萌芽を見出し得るが、地誌としての形式と内容を具備したものは新井白石の采覽異言以前には存しない。白石が伴天連ヨハン・バッティスタ・シローテとの問答を筆録したのはヨハン・バッティスタ物語であるが、更に

研究を進めて完成した采覽異言は世界地理として頗る要を得て居るのみならず、雙圓圖の卵形圖に勝るを説き、當時一般に信せられて居た南方の假想大陸メガラニカを否定する等、既に利媽竇圖に基く支那傳來の知識を超越せるを示したので、更に西洋紀聞の中卷にその大要を載せて居る。

日本地誌としては未だ見るべきものが現はれなかつたが、人國記を紹介し、日本總國風土記の偽作たるを明にし、日本分域指掌圖に於て最も整然たる組織ある日本地圖帖を示した關木齋が、日本地理志の編纂を企て、果さなかつたことは最も遺憾であつた。木齋は越前の人で伊藤仁齋に學び、三輪執齋・並河誠所等と親交があつた外、事蹟は明かでないが、姓は平、名は祖衡、字は叔甫、通稱は權平といふから武士らしく、武士とすれば窄人であつたらうと察せられる。彼の志を繼ぎ、幕府の補助を得て日本輿地通志畿内之部、即ち五畿内志を完成した並河誠所は遠州掛川の井伊家及び武藏川越の秋元家に仕へて後退去した窄人で、幕府の與へた文書にも明に窄人並河五一郎と記されて居る^②。

世界地誌・日本地誌の乏しいに反し、郷土地誌は質量共に最も進み、近世をして郷土地理時代たらしめた。當時の郷土地誌は形式上より見れば三種類に大別される。第一種は組織の整齊と調査・考證の精細を主とし、範を大明一統志に取つたものであり、第二種は名所案内を主とした名所記で、挿繪を加へ、詩歌・俳諧を交へ、讀物としても趣味を豊ならしめんとして居り、第三種は實用を主とし、町・寺社・役所・問屋等を列記した小本であつたが、第三種は地誌としての價值は最も劣つてゐた。第

一種の初見たる藝備國郡志寛文三年及びその最初の刊行たる雍州府志貞享三年十册の作者たる黒川道祐は儒醫を以て廣島の淺野家に仕へ、後病により致仕した罕人で、前者は祿仕中であるが、後者は罕人して後の作である。^③第一種の山城の地誌として雍州府志につぐものは山州名跡志正徳元年二十册と山城名勝志同年、三十册であつて、後者は朝臣たる大島求馬武好の作であるが、前者の作者釋白慧は罕人の出家であつて、これに先立つて年中行事を記した山城四季物語延寶二年六册及び本朝諸社一覽貞享二年八册を出した坂内直頼と同人であり、本書の跋に「代々以武藝鳴矣、慧亦在家繼其箕裘之業、壯歲來洛下」と記されてゐる。

第二種の名所記の初見は中川喜雲の京童明暦四年七月六册であつて、彼はこの後も鎌倉物語萬治二年五册、案内者寛文六册京の、跡追寛文七年、六册、京童續篇等を出した名所記初頭の代表的作者である。彼の祖先は細川政元に仕へた山城嵐山の城主香西元近であつて、京童の嵐山の城趾の條には「城主の末葉こしかたしたふ」と記して居るが、彼が一時廣島に居たことは先年廣島で得た安原貞室の書状でも明であり、跡追の最後に特に嚴島を加へ、他に例のない廣島からの往復を附してゐるのもその爲である。廣島の生活は不明であるが跡追の嚴島の紀行も有祿者として見る方が適はしい點もあり、京童の序によれば醫を學んでゐるから或は醫を以て仕へてゐたかも知れぬ。果して然らば彼の祖先が武人である上、彼も黒川道祐と同じく醫を以て淺野家に仕へて後罕人したことになる。京童の翌月刊行されて、内容に於て遙にこれを凌ぐものは洛陽名所集萬治元年八月、十一册であるが、その作者山本洞雲は本書岩倉山の條によれば、先祖は尊氏に仕

へ、四代前の若狭守利尙は小倉山の城主で國々に二十二ヶ所の領地を有し、祖父彦五郎富尙まで勢威強かつたが、「世途の淆亂せるにとかくし漂吟し、のち愚父友我是尙かひなく丹青をこととし、武陵に寓居し、大將軍の公用うけたまはり、年三十五にて業をやめ」たのであり、その子の記した古今軍林一徳鈔の序には「家父業已避官爲遊民」と記されてゐるから、彼も有力な武人の後たると共に自らも一種の窄人であつたと思はる。

この二人と同時代に名所記作者として大名を馳せ、自ら窄人たることを語つてゐるものは淺井了意と一無軒道治である。淺井了意は道中名所記の初見たる東海道名所記萬治二年六冊、江戸地誌の魁たる江戸

名所記寛文二年四冊及び京の町々を説いて新様を開いた京雀寛文五年七冊を出して居るが、その他假名草子・法語

等非常な多作家であり、著作年代も長いため、近年叡山文庫で三大部の願文の發見せられるまでは同名異人説さへ行はれた程であつた。^④彼は可笑記評判に自ら「あしびきの山鳥の尾のながくしき窄人

にて、陸沈潦倒し、偶洛下に寓居する」旨を記し、窄人の不遇・不満をも述べてゐるが、明暦の大火を記した武藏鑑萬治四年一冊の序に「足にまかせて都の方に上り」と言ひ、東海道名所記も江戸より京への紀

行體を取つてゐるを見れば、明暦の大火に焼け出されて京へ上つた窄人の一人であつたらう。一無軒道治は名所記として寺誌の權輿である高野山通念集寛文十二年十冊大坂の地誌の濫觴である蘆分船延寶三年六冊名所

記としての神社誌の最古たる住吉相生物語延寶四年四冊及び大坂の年中行事を記した難波鑑同八年六冊を出して

居るが、彼は紀伊頼宣に仕へ、その意に忤つて宰人し、醫を學んで、醫名の高かつた人であり、通念集に於ける舊主頼宣の墓の條は、その徳を頌し、懷舊の情切なるものがある。

以上によつて郷土地誌の最も主なる作者は殆ど宰人たることが知られるが、その他にも宰人の手になつた地誌は少くない。當代の國誌として主なる一つである近江の淡海録元祿元年序二十五卷の作者原田藏六は

自ら琵琶湖處士と記して居るが、釣雲子の序によればその曾祖父は結城秀康の家臣で「子孫門衰祚薄、

流落於湖」したので、彼は「可謂遊手方外之民」であつた。又甲州府志二十冊も萩生徂徠の編と言は

れ地誌、江戸の地誌として特色ある紫一本天和三年三冊も宰人たる戸田茂暉の作である文藝の條参照。京の日蓮宗

寺院を記した新篇法華靈場記貞享三年序十冊の作者豊臣義俊を武用辨要の著者木下義俊と同人と見、宰人歌人

長嘯子木下勝俊の一家の人と見ることも、必ずしも無理な想像ではあるまい。

註

① 本書の管見に入つたものは陸軍士官學校の藏本であるが、その問答は簡略であつて、采覽異言や西洋紀聞に見ゆる白石の知識は、この後、文献により、又オランダ人に問ひし結果たるを十分に察せしむるものである。本書が全集に洩れ、未だ刊行を見ないのは遺憾である。

② 史林、第二十一卷第三・四號所載、室賀信夫氏「並河誠所の五畿内志に就いて」。

③ 和田英松博士、「藝備の學者」二、黒川道祐。

④ 大谷大學國文學會報昭和七年七月號、北條秀雄氏「淺井了意の自筆願書」。

五、醫學本草學と宰人

醫學に於ては近世醫學の祖であり、天下に金元流を廣めた曲直瀬道三は佐々木源氏の堀部左門親實の子であつて窄人出身と見られるが、父の事蹟は明でない。道三の一族でその家を繼ぎ、朝廷幕府に仕へて子孫が典藥の筆頭となつた玄朔は、初め豊臣秀頼に仕へ、その滅亡と共に佐竹氏に預けられ常に謫居したが、後陽成天皇の御病腦により召返された人である寛政重修諸家譜 卷五百九十三。玄朔門の白眉としてその女に配し、秀忠家光に仕へた岡本玄治もその父を左門重治と言へば武士出身に相違なく同上、同じく玄朔門に出て東福門院に仕へた野間玄琢の祖父左衛門次郎宗安は織田信長に仕へて、後窄人となり、父次郎宗印も織田信長に仕へた人で、明に窄人出身である寛政重修諸家譜 卷八百三十五。

道三の系統以外で大名のあつた淺井周伯、岡本一抱、稻生恒軒、後藤良山等も悉く窄人の後である。

周伯、一抱は共に味岡三伯の門に學び、京で醫名の高かつた人であるが、周伯の祖父は豊臣氏に仕へ後辭して醫となつた人であり、一抱は近松門左衛門の弟で祖父は大坂窄人であり、父も越前家に仕へ後辭して京に住した人である文藝の條參照。稻生恒軒は祖父以來豊臣氏に仕へて居たが、彼の幼少の時大坂落城に逢ひ、醫に隠れた大坂窄人であり、小林見宜の門に學び、最も學究的な人であつた。後藤良山は金元流醫學の全盛の際、名古屋玄醫について古方醫學を唱へ、好んで溫泉、熊膽、艾炙を用ゐ、湯熊炙庵の名一世に高く、初めて古方が天下に勢力を有するに至らしめた人であるが、その曾祖父が豊臣秀吉に仕へ、病のため辭してから代々窄人であつた良山先生 碑銘行狀。

この他管鍼を工夫して杉山流鍼術を開き、綱吉に仕へて總檢技となつた杉山和一は藤堂家の臣權右衛門重政の長男であつたが、盲目のため江戸へ出て鍼を山瀬琢一に學んだ人である。杉山家譜、寛政重修諸家譜卷千四百五十九

又小兒科を以て幕府に召抱へられた吉田宗活、阿部順貞、塙宗安、同宗悦、太田宗勝等も皆罕人又はその後であつた。吉田宗活は豊臣氏の侍醫吉田周三の子で、小兒科として松平光長に仕へ、後朝廷、

幕府に召された。寛政重修諸家譜卷四百二十九。阿部順貞の祖父仁右衛門良成は荒木村重の重臣で攝津大和田で一萬石を

領し、父勘兵衛良長は村重没落の後豊臣秀次に仕へて千石を食み、後更に松平忠吉及び徳川義直に仕へたから三度罕人して三度召抱へられた人であつた。彼の兄弟三人は尾張家に仕へたが、彼は二男で幼より京に出て醫を學んだのである。同卷六百四十一。塙宗安の祖父左衛門重友は信長に仕へ、柴田勝家の女を

娶り、石山合戦に戦死して居り、父八右衛門安友は信長、秀吉に仕へ、秀次に附けられ、その滅亡により罕人となり關ヶ原陣には田中吉政の陣場を借りて首二つを得たが、後江戸に出て小兒科を業とした。宗安は家業を繼ぎ、兄頼安は淺野家に召抱へられ、その子宗悦が、彼と共に幕府に仕へた。同上、卷四百二十九

二。太田宗勝の祖父彌右衛門宗安は豊後臼杵の城主石六萬。飛驒守宗隆の弟で丹羽長秀に仕へ、父茂右衛門宗久に至つて罕人した。宗久も別所豊後守吉治及びその子大藏守治に仕へたが、守治が改易になつたため、守治に従つて罕籠し、小兒科を業として舊主を養つてゐたのである。同上、卷千四百四十一

以上は或は學界に大名あり、或は朝廷、幕府に仕へた醫者中罕人又はその後たるものを例示したが

醫者は當時窄人の生活方法として最も便利であつただけに、窄人のこれに従事したものは最も多かつたと思はれる。

本草學に於ても寛文中^②早く庖厨備用大和本草^{卷十三}を著した向井元升は曾祖父まで一城の主であつた土豪の子であることは既に述べたが^{備學の項參照}、全國を巡つて資料を集め、數十年の研鑽の結果遂に農業全書^{卷十}を大成した我が國農學の祖宮崎安貞も、廣島藩士宮崎儀右衛門の次男に生れ、國を去つて、一時福岡の黒田家に仕へ^{二百}石、辭して後この研究に没頭したのであつた。而して支那の本草綱目の分類法に甘んぜず、實驗的研究により庶物類纂の大著を成し、その整然たる組織により我が國獨自の本草學を成立せしめた稻生若水も、前に擧げた大坂窄人の醫に隠れた稻生恒軒の子であつた。

註 ① 醫學者本草學者の傳の日本醫譜、皇國名醫傳(淺田栗園)、日本醫學史(富士川游博士等に見ゆるものは一々註せぬ)。

六、文藝と窄人

最後に文藝を見るに、近世の初めに、「定家卿の御再誕」<sup>松永貞徳
戴恩記</sup>と言はれた細川幽齋によりて傳へら

れた中世の堂上歌道の一般に行はれた際、比較的自由な歌風を以て注意すべきは元政上人と木下長嘯子であるが、元政上人は彦根の井伊家の侍の出家したものであり、長嘯子は北政所の甥で、若狭小濱の城主であつたのが、關ヶ原陣の結果所領を失つた大名窄人であつた。而して歌道に於ける近世獨自の展開は、契沖の古典の自由研究と戸田茂暉の堂上歌道の排撃に革新の口火を切られた。契沖は幼にし

て僧になつたが、彼の祖父下川元宜は加藤清正に仕へて五千石を食み、その子又左衛門元眞は一萬石に至つて居り、元眞の弟で契沖の父である善兵衛元全は兄に養はれ、加藤家没落後宰人し、後攝津尼ヶ崎の青山家に二百五十石で召抱へられた人であるから契沖全集、傳記及傳記資料、彼も加藤宰人の子である。戸田茂暉の父渡邊監物忠は駿府の徳川忠長の重臣石六千で、忠長が罪を得たため下野那須野に蟄居したが、茂暉は八兵衛恭光と言ひ、叔父の養子として本多家に仕へ三百、その行政整理によつて宰人となつたのである。茂暉考彼の梨本集が古今傳授の無稽を喝破し、制の詞を二條家の私の定として斥けたことが、堂上歌道に對する致命的爆撃であつたことは言ふまでもない。併し歌道の革新は前期に於ては未だ理論に止まり、これに基く自由な和歌の創作はこれを後期に待たねばならなかつた。

俳諧に於ては貞門の祖松永貞徳、談林の祖西山宗因、蕉風の祖松尾芭蕉が共に悉く明に宰人又は宰人の子孫である。^①貞徳の父永種は武士の子であり、藤原惺窩の父冷泉爲純とは從昆弟であつた貞徳作戴恩記が、その家系には異説がある。^②貞徳の子である尺五の行狀には永種を松永久秀の季子とし、俳諧家譜には攝州高槻の刺史入江九郎盛重の男五郎政重の長子とし、菟つげ泥ねぶ赴ほ北村季吟作には播州高槻の城主入江五郎政次の孫で、久秀が一族の故に養子として僧としたとして居る。併しこれは行狀の季子は養子を誤つたものと見るべく、久秀の伯母が政重の母であつた俳諧京羽二重のが、養子とした因縁であらう。されば貞徳の父は幼にして僧となり、後には歌、連歌で知られた寶幢坊徳庵であるが、名ある武士の子で

公家の親戚も有する窄人であつた。西山宗因は初め次郎作豊一とて熊本城主加藤忠廣の老臣であつた。加藤正方(風庵)に仕へ、主と共に歌、連歌を學んだが、寛永九年忠廣の改易により主従共窄人となつたのである。芭蕉も宗因に似て、津の藤堂家の老臣で伊賀上野の城代であつた藤堂新七郎良精に仕へ、その子主計良忠(蟬吟)に侍して、主と共に北村季吟に俳諧を學んだ甚七郎宗房であつた。然るに良忠が早逝したので、その位牌を高野山に收めた後、脱走したのである。されば俳諧の三祖は何れも自ら窄人したか、窄人の子であつた。

彼等の外にも窄人俳人は少くない。貞門の齋藤徳元は江戸五俳哲の一人で、誹諧初學抄の作者として知られた人だが、岐阜城主織田秀信に仕へ^{三千}石、關ヶ原陣に主の先途を見届けず、長良川を越えて脱走して臆病者の名を流したといふから芳しからざる窄人振である。蕉門では十哲中の其角・蘭雪・去來・丈草・越人及び嵐蘭・桃隣等は窄人又は窄人の後である。榎本其角の父は竹下東順とて代々江州堅田の郷士であり、江戸へ出て醫を以て本多下野守に仕へ、晩年致仕した人で、榎本は母の氏を稱したのだといふ。服部嵐雪は初め新庄隱岐守に仕へ、更に井上相摸守に抱へられて後致仕した窄人であり、向井去來は曾祖父まで一城の主であり、父の時まで郷士であつた儒醫向井玄升の子で、初は武藝を學んで騎に長じたが、後弓矢を捨てて嵯峨に隱棲したのである。内藤丈草は尾州家の老臣寺尾土佐守直龍に仕へたが、家を繼母の出である弟に譲らんため、指を切り、刀が執れないのを口實に遁世したの

であつた。越人は熊本細川家の臣で佐分利流の槍術で聞えたが、吉原の遊女に溺れて御暇になつて尾張に來たとの説がある。蕉門諸生全傳。而して嵐蘭は板倉家に仕へて松倉甚兵衛盛教と稱した三百が、諫言して用ゐられなかつたため致仕した人であり、桃隣は芭蕉と同じく上野の藤堂氏の舊臣で、芭蕉の従弟だと言はれて居るのである。

小説の作者についても、初期の假名草子の代表作家たる如儡子、鈴木正三、淺井了意は何れも宰人又はそれに準すべき人々である。寛永十三年作 百八町記承應四年作を出した如儡子は本名さへ確でないが、可笑記中に散見する所によれば、最上宰人で「侍が戦場にのぞみては討死を心がけ、心を剛に持つべし、是則義といふものなり」と教へた父の子に生れ、「運は天にあり、よひろはむねにあり」と言つて、鎧を用ゐず、茜紬の羽織のみ着て先頭、殿を勤め、一生薄手も負はなかつた東禪寺右馬頭と、敵が鐵砲を打たんとする刹那を狙つて、その眉間を一矢に貫いた大井左近とを伯父に持ち、自分は父を失ひ、母と江戸に出で、「大すり切なればなか／＼身上かせぐべき手だてもなく」、「よき近付親類ともあらばや、藝能才智ある身にもあらず」、「誠に沖津舟のよるべ定めぬうき身」を釘屋の豊田喜右衛門といふ武家出の町人に寄せ、「がつさう頭にやつし、刀脇差をもさゝず、ぶらり／＼とさまよひありく」有様であつたが、併し「常に研き磨き、ねたばを合せ秘藏し持ちたる一腰の劍あり、吹毛の劍と名付け、せつなが間も身を放さず」、事ある時には「おつとり出して首尾に合せんこと何の不足やあ

らん」の覺悟を失はぬ窄人であつた。二人比丘尼寛文三、年刊、因果物語寛文元、年刊、念佛草紙の作者として知られ

た鈴木正三は、父重次が家康に仕へて關ヶ原、大坂陣に功あり五百石、彼も大坂陣の功で別に二百石を與

へられたが、元和五年致仕して出家し、二王禪の一流を開いた人で、その作も假名法語が多く、假名

草子として知らるゝものもその類を出でない。^④浮世物語寛文、年刊、伽婢子寛文六、年刊を初め多作家として著名な

淺井了意が、「山鳥の尾の長々しき窄人」であつたことは既に述べたが、浮世物語が假名草子中の傑作

として後の浮世草子の前驅たるものであり、支那の剪燈新話等を翻譯した伽婢子が、今後怪談文學の

端を開いたことは特記すべきである。以上の三人の外にも元和三年に吾妻物語一名色音論を書いた徳

永戸右衛門尉種久は自ら「先祖田尻中務太夫中書秋種」と記し、「今者江戸於御旗本櫻井之家有之」と言

へば、奥州信夫の出である彼が筑後柳川からの江戸への紀行も窄人の有付のためとも思はれるが、旗

本櫻井氏に召抱へられたか、寄寓してゐたかは明でない。そゝろ物語寛永十、八年刊の作者三浦淨心は北條窄

人であり、悔草正保四、年刊の作者と傳ふる井上小左衛門は大坂窄人らしく、清水物語寛永十、五年刊の作者朝山意

林庵は朝山日乗の孫で、細川家及び徳川忠長の舊臣であつたことは前に述べた備學の、項参照。

浮世草子を創始した井原西鶴は伊藤梅宇仁齋、次男の見聞談叢によつて平山藤五なる有徳の町人であつた

ことが知られ、通稱を平太夫と言つた窄人との推測は解消するに至つた。^⑤浮世草子の作者はその他も

身分の明なるものが乏しいが、風流神代卷元祿十、五年刊、風流源氏物語元祿十、六年刊に古典を俗譯し、元祿會我物語、

御前御伽婢子、沖津白浪共元祿十五年刊に巷談異聞を記した都之錦は、後江戸で無宿改に捕へられ薩摩の金山人足にやられ、脱走せんとして投獄され、苦痛の餘りに斬首を願ひ出た訴狀なるものが傳はり、これに従へば、松平萬右衛門康富の子で攝津の佐用姫明神の神主となり、八田宮内少輔光風と稱したが、京都に修學中身持悪く勘當を受けたもので、明に牽人と見るべきである。^⑥唯父の松平萬右衛門康富は康等の誤寫で、佐用姫明神の攝津も播磨の誤であらう。松平萬右衛門康等は播磨佐用郡で二千石を領した旗本で書院番を勤めたが、彼は八男で長兄の養子となつたのであり、その兄達は殆ど皆陪臣となつてゐるから、養子となる前にその子を兄の領内の神主としたことは不思議ではない。播磨の佐用姫明神は播磨風土記にも延喜式にも載つて居る由緒の古い社である寛政重修諸家譜卷三百七十四。又京縫鎖帷子寶永三年刊に近松の堀河波の鼓と同じ女敵討を描いた森本東鳥は自ら洛陽隱士と署名して居り、忠孝太平記に載せた畫像には床に鎧を飾つて居る位で牽人を以て任じたことは間違なからう。唯同書に見ゆる系圖には「先祖林文内は昔藝州野間の片里に住し農民なりし」由を記し、文内の孝行領主に聞え林村を賜つたら氏を林と稱したといふを以て見れば百姓出となるが、その後郷士に轉じたものであらう。

淨瑠璃の作者は殆どその事蹟が不明であるが、その祖と傳へられた小野お通及びその大成者近松門左衛門が共に武家出身たることは注目すべきである。淨瑠璃が既に享祿天文の頃語られて居たことが知られては守武千句、宗長日記、お通をその祖とはし難く、十二段草子も彼女の作か疑はしいが、彼女の父が小野

正秀と呼ぶ美濃の侍で、六條河原の合戦に討死したことは寛永十八年に大徳寺天祐が彼女のために書いた記眞田文書所収によつて知られるから、武家出たることは争はれない。彼女が秀吉の侍女として醍醐の花見に陪したことは短冊の存するので知られるが三寶、その後は娘が信州松代の眞田家の側室となつた縁で松代へ赴いた外は確實には解らない眞田勘解由系圖等。近松門左衛門もその出身に種々の説があつて何れが眞なるを知らなかつたが、淀藩の杉森氏系圖が公にせられてその家系が明になつた。^⑦これによれば彼の祖父市兵衛信重は大坂窄人で、後稻葉美濃守正則に仕へたが石干、父市左衛門信義はその次男で越前の松平忠昌に仕へ、後窄人して京で没し、彼はその次男で一時一條禪閣昭良に仕へたことが知られ、

「代々甲冑の家に生れながら武林を離れ、三槐九卿につかへ咫尺し奉りて寸爵なく」と辭世の詞書に自記した意味も明になつた。されば大近松が武士的精神を愛重し、武士の義理を町人にも及ぼし、心中にも意地と義理が強く現れ、愛に殉じて死ぬ潔さを強調して、事件・人物を淨化し美化する理想主義的態度も決して偶然でないのである。

註 ③ 藤井乙男博士、「江戸文學研究」所収、「松永貞徳の父祖について」。

① 俳人については俳諧家譜(丈石)、同捨遺集(十口)、同後捨遺(十口)、俳家大系圖(生川春明)等に見ゆる所、今一々註記しない。

③ 小説作者については「列傳躰小説史(水谷不倒氏)」、「近世作家大觀(鈴木行三氏)等参照。

④ 藝文第七卷第七號所載、石田元季氏「鈴木正三」。

- ⑤ 國語と國文學、第五十七號所載、藤村作博士、「井原西鶴は平山藤五か」。
- ⑥ 早稻田文學、明治二十九年六月號所載、饗庭篁村氏「小説家の人物」。
- ⑦ 國語と國文學、第二卷第八號、田邊密藏氏「近松門左衛門の所出に就て」。

七、附 言

以上は近世前半期に於ける學問・文藝に對する牽人の貢獻の一端を擧げたに過ぎぬ。猶この外にも近世數學の祖と仰がれた毛利勘兵衛重能は初め池田輝政に仕へ、次いで豊臣秀吉に召し出されたが、入明二度、専ら算道を究めて歸り、和算書の最初である歸除法を著し、京に算法を講じた人である^{日本}數學。前土佐國主長曾我部盛親が大坂陣前相國寺門前で寺子屋を開いてゐた如く^{大坂御陣山、口休庵咄}、牽人が初等教育機關たる寺子屋を経營したことは、最も多かつたやうである。又浮世繪の祖と稱せられた岩佐又兵衛勝以は荒木村重の末子と傳へ、織田信雄の遺臣で晩年越前家に召抱へられた人であり^{岩佐家、英一系圖}、蝶も亦石川家の侍醫を辭した多賀伯庵の子であり、左甚五郎も足利家の臣で亂を明石に避けた伊丹正利の子であるといふ。女歌舞伎の祖出雲お國を助けた名古屋山三郎は蒲生氏郷の遺臣で、後森忠政に仕へたと謂はれて居り^{蒲生軍記、森家傳記}、若衆歌舞伎時代の江戸の代表者猿若勘三郎は沼津城主中村一榮の弟右近の孫と稱し、初代市川團十郎亦甲州の土堀越十郎の子と傳へて居る。これ等の中には固よりその確實性の不充分なものもないが、近世文化に對する牽人の貢獻の如何に著しかつたかを察する

には、以上の例によつて十分であらう。されば近世前期の文化は或意味に於ては窄人文化の時代と謂つてもあながち過言ではないであらう。

(昭和十一年十一月講演、同十二年三月補訂)

前號所載「近世文化と窄人(上)」正誤

頁	行	誤	正
二五二	五・九	向井玄外	向井玄升
二五四	一	淺見綱齋	淺見綱齋
	六	生達遺事	先達遺事
	一二	朝山意村庵	朝山意林庵
二五六	一	山鹿素行子	素行子山鹿甚五左衛門
二五七	二	朝山意村庵	朝山意林庵
二五九	一五	清右衛門	清右衛門は
二六〇	六	朱舜	朱舜水
	六	安積滲伯	安積滄泊
二六三	二	元和三年	寛永二年